

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 21 日現在

機関番号：82674

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009 年～2011 年

課題番号：21592939

研究課題名（和文）

高齢介護者の介護負担感を低減する被介護者の介護者サポート行動とその背景要因の検討

研究課題名（英文） The relationships between the active roles of care-recipients and care-givers' and their own well-beings: Focus on the care-recipients' supportive behaviors for care-givers and gerotranscendence.

研究代表者

増井 幸恵 (MASUI YUKIE)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）

・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：10415507

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、虚弱高齢者、介護が必要な高齢者が行う他者をサポートしようとする行動が、①介護者ならびに自分自身の心理的 well-being の向上につながるか、②具体的にどのような行動が well-being の維持向上と関連するのか、を検討することである。要介護高齢者本人やその家族に対するインタビューに基づく質的研究および虚弱高齢者への量的な調査研究からは、被介護者本人が行う a.周囲の人への情緒的、手段的サポート行動の提供、b.セルフケアや家庭内での役割を果たすこと、などの介護者サポート行動が介護者および本人の心理的適応を促すことが明らかとなった。また、その関連要因として老年的超越などの個人特性が関連していることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of these studies are to investigate that the older care-recipients' supportive behaviors for care-givers improve care-givers' and their own well-beings, and which sorts of supportive behaviors associate with improvement of their well-beings. Both qualitative studies using by interview of the care-recipients and givers and quantitative studies indicated that the care-recipients' supportive behaviors, for example emotional and instrumental supports, self-cares and playing domestic role, improve care-givers' and their own well-beings. And the personal factors, for example gerotranscendence associated with the care-recipients' supportive behaviors and their well-being.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：介護負担感、介護者サポート、老老介護、人間関係、老年的超越

1. 研究開始当初の背景

現在、日本では 75 歳以上の後期高齢者や 85 歳以上の超高齢者と呼ばれる層が急増し、平成 19 年には全人口の 1 割を占めるまでになった。このことは、反面、要介護高齢者の増加を示唆している。2002 年に我々の研究チームが行った地域在住の 85 歳以上超高齢の調査では、調査参加者の約 4 割が要介護状態であり、しかも、彼らの主介護者の平均年齢は 66 歳といわゆる「老老介護」状態であることが示された。高齢介護者は介護者自身の疾病や体力の低下などから介護負担はより若い介護者の場合よりも大きいことが予想されるが、高齢介護者の負担感に関する研究は少なく、これに影響する要因についても不明な点が多い。

今後とも増加すると予想される高齢介護者の負担感を低減し、在宅介護の継続を図るためには、物理的・身体的負担の減少が重要であることは言うまでもないが、介護負担感に影響しうる要因を多方面から把握し、様々なアプローチで負担の低減を提案していくことが重要であるが、これまでの介護負担感研究においては、提供する介護の質と量など主介護者側の要因および、主介護者以外の者から主介護者に提供される手段的・情緒的サポートの性質などが主であり、介護を受ける主体であるべき被介護者の主体的な関わりについてはほとんど論じられていなかった。

2. 研究の目的

そこで、我々は主に 85 歳以上の超高齢者層を対象として、介護場面における被介護者側の主体的な要因が、介護者の介護負担感の低減や被介護者自身の心理的適応の向上に対して影響を持つかについて検討を行うこととした。検討する要因としては、①Russellらが提唱した、主体的に介護者を保護するようなサポート行動である「保護的な介護受容：protective care-receiving」行動や、通常 of 他者サポート行動、および②虚弱で介護が必要になるようとしている超高齢者の心理的適応に重要な役割を果たすと考えられる個人特性的な心理的要因、特に「老年的超越：gerotranscendence」の検討を行うため、質的研究 2 つ、量的研究を 2 つ実施した。

3. 研究の方法

(1)「被介護者の保護的な介護受容行動と介護負担感の関係の質的検討」：地域在住の要介護超高齢者 10 名(男性 2 名、女性 8 名、平均年齢 95.2 歳：範囲 88-103 歳)の介護者 10 名(男性 1 名、女性 9 名平均年齢 64.4 歳：範囲 58-78 歳)に対して、a.「被介護者の介護場面における介護者サポート行動」に関する質問(介護を少なくする工夫、被介護者を

心身両面から支える行動、自分の死後の配慮)、b.被介護者の障害の状態(現病、要介護度、ADL、問題と思われる行動の有無)、c.介護内容(普段行っている介護内容、夜間介護の有無と内容、共同介護者、介護サービスの利用)、d.介護者の心身状況(現病、健康感、介護負担感)、e.介護者と被介護者の人間関係(介護開始前、介護開始後)を半構造化面接によって尋ねた。

(2)「要介護超高齢者における「生の意味」と心理的適応」：地域在住の要介護超高齢者 8 名(男性 4 名、女性 4 名、平均年齢 94.5 歳：範囲 88-103 歳)に対して、面接によるインタビューを行った。インタビューでは、それぞれの高齢者が、「日常生活において、自分自身の虚弱化やそれから生じる困難な状況をどのように認識し、生きているのか?」という点が明らかになるよう、面接を行っていった。

(3)「虚弱超高齢者における老年的超越と心理的適応との関係」：小規模地域における 85 歳以上の悉皆訪問調査に参加した 155 名(男性 54 名、女性 101 名、平均 88.4 歳、SD3.2 歳、範囲 85-99 歳、参加率 46.4%)に対して、日本版老年的超越質問紙(増井ら、2010)、心理的 well-being の指標として、抑うつ状態(Geriatric Depression Scale 5 項目版)、健康度自己評価、主観的幸福感(PGC モラル・スケール日本語版)を測定した。また、生活機能および身体機能の指標として、老研式活動能力指標、ADL(バーセル指標を測定した。その他、年齢、性別、同居形態、学歴、認知機能(Mini-Mental State Examination: MMSE)、治療中の病気の有無、外出頻度を尋ねた。

(4)「虚弱高齢者における他者サポート行動と精神的健康との関係」70 歳から 79 歳の地域高齢者 2210 名に郵送調査を実施した。このうち、1,381 票が回収され(回収率 62.5%)、年齢、性別、調査票の記入者への回答の漏れのなかった 1253 票(男性 539 名、女性 714 名、平均年齢 74.0±2.8 歳)が有効回答となった(有効回答率 56.7%)。測定項目は、他者サポート行動 10 項目(①相談にのる、②病人を見舞う、③病人の看病をする、④家族や友人を慰めたり励ます、⑤家族や友人の話を積極的に聞く、⑥人の世話をする、⑦家事や家の仕事をする、⑧奉仕活動やボランティア活動をする、⑨募金や寄付をする、⑩若い人にもものを教えたり、助言をする)、現在介護が必要か、生活機能(老研式活動能力指標)、性別、生年月、年齢、回答者、住居状況、同居状況、主観的健康感、総合 ADL、慢性疾

患の既往、現在の就労、最終学歴、精神的健康、であった。

4. 研究成果

(1) 「被介護者の保護的な介護受容行動と介護負担感の関係の質的検討」

介護者の「被介護者の介護場面における介護者サポート行動」に関する発言を整理したところ、のべ 76 発言が得られた。その内訳は、セルフケアや不要な介護の拒否など「a. 被介護者による介護量の低減行動」に関する発言が 30%、介護場面において介護者の感情をよくすることや介護者の方針に従うなどの「b. 介護者を保護する行動」に関する発言が 65%、介護者への金銭援助など「c. 介護場面以外での介護者を保護する行動」が 5%となった。これらの結果からは、日本の 85 歳以上の超高齢者における介護場面においても、Russell らの保護的な介護受容行動と同様の行動が行われていることが明らかとなった。また、3つの領域のうち、「b. 介護者を保護する行動」領域が 65%で最も発言が多かったが、この領域の下位カテゴリの中でも、「介護者の感情への配慮」や「介護者の介護方法に従う」が7割を占め、超高齢者の在宅介護においては、被介護者は介護者の心理的快適さを重視し、介護者保護行動をおこなっていることが考えられた。

次に、被介護者の介護者サポート行動と介護者の介護負担感の関係を検討した。まず、10 の事例ごとに、「a. 被介護者による介護量の低減行動」、「b. 介護者の保護」、「c. 介護場面以外での介護者を保護する行動」別に集計した。また、この3つの領域別の得点を全て加算した得点を総得点とした。その結果、b. 介護者への保護得点 ($r=-.78$)、および総得点 ($r=-.92$) が高いほど、介護負担感が低くなるということがわかった。

次に、被介護者の主観的幸福感の指標である、PGC モラル尺度の得点と被介護者の「介護者サポート行動」との関係を検討した。サポート行動の領域ごとの得点と PGC モラルスケールの総得点との相関係数を求めたところ、自分自身の保護得点と PGC の相関は $r=.30$ でやや弱い相関があり、自分自身への保護得点の高い者は主観的幸福感が高いことが示された。他の領域の得点とは明確な相関は見られなかった。

これらの結果から、日本の在宅介護場面において、被介護者の行う「介護者サポート行動」のうち、「介護者を保護する行動」は介護負担感の低減と関連し、「介護量の低減行動」は被介護者自身の主観的幸福感を向上させる可能性が示された。

(2) 「要介護超高齢者における『生の意味』と心理的適応」

対象者のインタビューテキストについて解釈的現象学の視点から質的分析を行った。超高齢者の語りのうち、生命、生活、人生という生 (life) の諸側面に対する意味や価値に焦点を当て、意味ある単位に分類した結果、以下の4つのテーマが見出された。①「つながっていること」：実際に存在する人とのつながりだけでなく、死者や神仏、もしくは未来の子どもたちなど、直接触れ合うことはない、見えない存在とのつながりを感じている。一見、孤独な状況に見えても、見えない存在との「つながり」は感じている。②「変わっていくことに気づくこと」：病気やけがなど明確に意識できる出来事だけでなく、体力など日々の小さな変化に気づくことによって、これからも自分に変化が起これば続けるとわかっている。そして、死がこの変化の延長線上にあるとの認識があった。③「変わらないことを見いだすこと」：現在、徐々に体が変化しても、変わらず存続していく自己の存在にも気が付いている。これは、絶対的な評価でも、相対的な評価でもなく認識の仕方であると考えられた。④「自分だけにできることをみつけること」：身体機能の低下や移動制限といった制約の中で、自分だけにできることを自由に見つけていた。傍から見ると、逆効果だと思われる行動であっても、それが楽しみだと語られていた。そして、この楽しみの発見は自分ならではの「創造性」であると認識されていた。

これらの介護に必要な超高齢者の発言からは、生の有限性 (変わっていくこと) と無限性 (変わらないこと) を同時に感受する、また、自分だけの世界 (自分だけにできること) と過去や未来の他者と繋がった世界 (つながっていること) を同時に感受している、といった矛盾するものを包含した世界観を持つことが、彼らの心理的な適応を支えていることが考えられた。そして、このような境地は、Tornstam が提唱した老年的超越と類似していると考えられた。

(3) 「虚弱超高齢者における老年的超越と心理的適応との関係」：まず、虚弱であるが心理的適応のよい集団を抽出するために、生活機能と心理的適応の状態により、対象者を分類した。分類のための変数として、老年式活動能力指標、抑うつ状態、健康度自己評価、PGC モラルスケールについて欠損のない149名 (男性51名、女性98名) を SPSS の大規模集団のクラスター分析により分類を行った。クラスター数を3とした時、クラスター1(34名)は生活機能が低いながらも心理的 well-being 指標が全般的に高いグループとなった。クラスター2 (31名) は生活機能も心理的 well-being も全般的に低いグループであった。クラスター3 (84名) は生活機能と

心理的 well-being が共に高いことが示された。そこで、生活機能が低い2つのグループについて、この2つのグループで有意差があった年齢、外出回数、独居率、ADLを調整して、日本版老年的超越質問紙の8つの下位尺度得点を比較した。その結果、生活機能は低いwell-beingの高いグループは、生活機能もwell-beingも低いグループよりも、内向性（ひとりであることのよい面を認識していること）、社会的自己からの解放（過去の自分にとらわれない、見栄を張らない）、無為自然（あるがままを受け入れる。無理しない、頑張らない）の得点が高く、宗教的もしくはスピリチュアルな態度（超自然的な存在などを信じるようになる）の得点が低かった。

これらの結果から、生活機能が低下し虚弱な高齢者の心理的適応と老年的超越の要因が関連することが示され、研究2の質的研究で示された虚弱超高齢者の認識や世界観はTornstamの老年的超越と近いという考察を支持するものであった。

（4）「虚弱高齢者における他者サポート行動と精神的健康との関係」

有効回答者1253名のうち、介護が必要であると回答した81名（男性38名、女性43名）について、精神的健康（得点範囲0-2）と10のサポート提供行動（有無）との関係について、 χ^2 検定により単相関を検討した。その結果「②病人を見舞う」（ $p=.01$ ）、「④家族や友人を慰めたり励ます」（ $p=.07$ ）、「⑤家族や友人の話を積極的に聞く」（ $p=.02$ ）、「⑦家事や家の仕事をする」（ $p=.06$ ）、「⑨募金や寄付をする」（ $p=.07$ ）、「⑩若い人にもものを教えたり、助言をする」（ $p=.08$ ）の項目において有意水準10%以上で関連がみられた。

次に、単相関で有意であった6つのサポート行動について、従属変数を精神的健康、独立変数に各サポート行動の有無、そして調整変数に年齢、性別、学歴、同居者の有無、IADLレベルまでの移動能力を一括投入した回帰分析を行った。その結果、これらの年齢、性別、移動能力などを調整しても、「②病人を見舞う」（ $\beta=.30$ $p=.02$ ）、「⑤家族や友人の話を積極的に聞く」（ $\beta=.23$ $p=.07$ ）、「⑦家事や家の仕事をする」（ $\beta=.32$ $p=.02$ ）、「⑨募金や寄付をする」（ $\beta=.22$ $p=.07$ ）、「⑩若い人にもものを教えたり、助言をする」（ $\beta=.19$ $p=.09$ ）の各変数は独立して精神的健康に対して正の関連を持つことが示された。

一方、介護が必要のない1060名に対して同様の分析を行ったところ、「②病人を見舞う」（ $\beta=.17$ $p=.00$ ）、「⑤家族や友人の話を積極的に聞く」（ $\beta=.05$ $p=.08$ ）、「⑦家事や家の仕事をする」（ $\beta=.08$ $p=.01$ ）、「⑨募金や寄付をする」（ $\beta=.05$ $p=.12$ ）、「⑩若い人にもものを教えたり、助言をする」（ $\beta=.13$

$p=.00$ ）と、介護が必要な者の場合よりも、これらの他者サポート行動が精神的健康と関連する強さが弱いことが示された。

これらの結果から、介護が必要な虚弱高齢者においては、健康な人の場合よりも、身近な人へのサポート行動が精神的健康の維持に大きな役割を果たすことが示された。

（5）結論

本研究では、主に介護が必要な85歳以上の超高齢者において、彼らが主体的に行う介護者および他者をサポートする行動を行うことが、介護者の負担感の低減および被介護者自身のwell-beingの維持向上に関連するかを質的研究および量的研究の両者を用いて検討した。その結果、在宅の要介護超高齢者においてもRussellらが提唱した「保護的な介護受容」と同様の介護者サポート行動を行っており、その質と量が介護者負担感の低さと強い関連を持っていることが示された。

一方、被介護者が行う介護者サポート行動やセルフケアは被介護者自身のwell-beingと関連していることが示された。また、虚弱もしくは要介護高齢者のwell-beingや精神的健康には、本人が自らの変化を受容しつつも、その中で自分のできることを見出し、自分のできる範囲で周囲をサポートし、つながろうとする老年的超越の特性や他者サポート行動が強く関連していることが示された。

これらの知見は、被介護者の主体的行動が介護場面全体のwell-beingにつながることを示すものであると言える。しかしながら、本研究はすべて横断デザインで実施されており、今後は縦断デザインなどを用いて因果関係について検討する必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

増井幸恵、榎藤恭之、高橋龍太郎ら：“心理的well-beingが高い虚弱超高齢者における老年的超越の特徴-新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて-” 老年社会科学、32(1)、33-47(2010)、1：査読あり

中川威、増井幸恵、高橋龍太郎、榎藤恭之ら：超高齢者の語りにもみる生(life)の意味 老年社会科学、33(1)、422-433(2011)。：査読あり

〔学会発表〕（計13件）

増井幸恵、榎藤恭之、河合千恵子ら：Well-beingが高い虚弱超高齢者のerotransendence特性の検討。日本老年

社会科学会第 51 回大会, 2009.6.19, パシ
フィコ横浜.

中川威、増井幸恵、榎藤恭之ら: 虚弱超高齢
者における老年的超越の徴候に関する質
的研究. 日本老年社会科学会第 51 回大会,
2009.6.19, パシフィコ横浜.

増井幸恵: 超高齢期における身体・活動能力低
下への心理的適応—適応機制としての老
年の超越—第 21 回日本発達心理学会大
会, 2010.3.27, 神戸国際会議場.

増井幸恵、榎藤恭之、高橋龍太郎ら: 在宅超高
齢者の健康関連 QOL に対する高次生活機
能と老年的超越の影響—虚弱超高齢者の
健康関連 QOL 低下に対する老年的超越の
緩衝効果の可能性—日本老年社会科学会
第 52 回大会, 2010.6.17, 国立長寿医療研究
センター

増井幸恵、榎藤恭之、冨澤公子ら: 健やかな超
高齢社会を目指して—老年的超越の理論
と応用— 日本心理学会第 74 回大会,
2010.10.20, 大阪大学.

Masui, Y., Gondo, Y., Takahashi, R. et al:
The characteristics of
gerotranscendence in frail oldest-old
individuals who maintain high level of
psychological well-being. The
Gerontological Society of America 62nd
Annual Scientific Meeting,
2010.11.20, New Orleans.

山崎幸子、増井幸恵、針金まゆみら: 高齢期う
つに対する心理学的アプローチの展望,
第 53 回日本老年社会科学大会,
2011.6.6-17, 東京

稲垣宏樹、増井幸恵、小川まどから: 地域在
住高齢者を対象とした心身の健康状態に
関する追跡調査 「中年からの老化予防」
長期縦断研究心理学的調査の結果から.
第 53 回日本老年社会科学大会,
2011.6.6-17, 東京

針金まゆみ、増井幸恵、山崎 幸子ら: 実証
研究からみる高齢者のうつと心理社会的
要因. 日本心理学会第 75 回大会,
2011.9.15-17, 東京

増井幸恵、榎藤恭之、小川まどから: Big Five
性格検査はどこまで短縮できるか?—地
域在住高齢者の日本版 NEO Five Factor
Inventory (NEO-FFI) データを用いた検
討—. 日本心理学会第 75 回大会.
2011.9.15-17. 東京

小川まどか、石岡良子、榎藤恭之、増井幸恵
ら: 高齢者の余暇活動の選択に及ぼす性格
傾向の影響—SONIC Study における 70
歳調査の結果から—. 日本心理学会第 75
回大会, 2011.9.15-17. 東京

中川威、榎藤恭之、増井幸恵ら: 前期高齢者
におけるサクセスフル・エイジング—
SONIC Study の横断調査の結果から—.

第 6 回応用老年学会総会, 2011.11.11, 神
戸

Ogawa, M., Ishioka, Y., Gondo, Y., Masui, Y.
et.al: Classification by Leisure
Activities of Japanese elderly people
and Relationship with Personality :
from The SONIC Study. The
Gerontological Society of America 64th
Annual Scientific Meeting,
2011.11.18-22, Boston.

〔図書〕 (計 1 件)

増井幸恵: 新老年学(第 3 版) 3.2 高齢者の
感情と人格(大内尉義・秋山弘子(編集代
表))(東京大学出版会). 1663-1673 (2010)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕 なし
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増井 幸恵 (YUKIE MASUI)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療セ
ンター (東京都健康長寿医療センター研究
所)・東京都健康長寿医療センター研究
所・研究員

研究者番号: 10415507

(2) 研究分担者

榎藤 恭之 (GONDO YASUYUKI)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号: 40250196

伊東 美緒 (ITO MIO)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療セ
ンター (東京都健康長寿医療センター研究
所)・東京都健康長寿医療センター研究
所・研究員

研究者番号: 20450562

高橋 龍太郎 (TAKAHASHI RYUTARO)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療セ
ンター (東京都健康長寿医療センター研究
所)・東京都健康長寿医療センター研究
所・副所長

研究者番号: 20150881

(3) 連携研究者: なし